

A longitudinal study of gender differences in quality of life among Japanese patients with lower rectal cancer treated with sphincter-saving surgery : a 1-year follow-up

木下, 由美子

<https://doi.org/10.15017/1500548>

---

出版情報 : 九州大学, 2014, 博士 (看護学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 : 全文ファイル公表済

氏 名： 木下 由美子

論 文 名： A longitudinal study of gender differences in quality of life among Japanese patients with lower rectal cancer treated with sphincter-saving surgery: a 1-year follow-up

(肛門温存手術を受けた日本人下部直腸癌患者の生活の質の性差に関する縦断的研究：1年の追跡調査)

区 分：甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

**背景：**直腸癌患者の80%は肛門温存手術を受け、その約90%は、続発的な身体的変化を経験する。性差が肛門温存手術後の変化に及ぼす影響の研究は増加しており、性差と症状および患者のアウトカムに関連についての関心は高まってきている。しかし、生活の質(QOL)と癌に関連した症状における性差についてはほとんど明らかになっていない。我々は、肛門温存手術を受けた下部直腸癌患者を対象に1年間、健康状態およびQOLの変化と性差について調査した。

**方法：**対象は術前および術後1・6・12ヵ月目にQOLと関連因子についてすべて自記式質問紙に回答した患者(男性=42名、女性=33名)である。アンケートは、European Organization for Research and Treatment of Cancer (EORTC QLQ-C30)によって開発されたものを用いた。

**結果：**全患者の身体・役割・社会機能および全般的な健康状態/QOLのスコアは、男性の社会機能を除いて、術後1ヵ月目に減少し、術後6ヵ月で改善して、術後12ヵ月以内にベースラインに戻った。QOL関連因子は、術後に変化し、男性と女性では異なっていた。全般的な健康状態/QOLは、女性では、倦怠感、体重減少、排便問題、将来展望により負の影響を受けていた。一方、男性では、倦怠感、体重減少、将来展望、役割機能の影響を受けており、その役割機能は、痛み、排便問題、経済的困難の影響を受けていた。

**結論：**手術を受けた癌患者のQOLを予測する場合には、性差が考慮されるべきである。性差を明らかにすることは、保健医療提供者が直腸癌手術を受けた患者の独自のニーズを予想する助けとなる。